1960年代における革命理想とアジア主義

―竹内好のアジア論を中心に―

劉　　金　鵬

【キーワード】竹内好、アジア主義、明治維新、ナショナリズム、歴史の再構築

1．はじめに

1960年、日本の知識人は安保闘争という国民規模の運動を経験した。闘争は安保条約改正を阻止できなかったとはいえ、岸内閣を退陣させるといった歴史的な成果を収めたことは、多くの知識人の共通認識だった。安保闘争の経験をそれからの日本社会にどのように生かせば良いかという問題は、1960年代の思想界で大きなテーマであった。そのなか、竹内好は安保闘争と日本ナショナリズムの健全化を結びつけようとし、独自な議論を展開していた。しかし、竹内好に関する多くの研究は1960年前半までにとどまり、管見の限り、この結び付きに関する論考は、明治百年際をめぐる桑原武夫と竹内好の発言を考察した鈴木洋仁の研究[1]を除けばほとんどなかった。本稿では、筆者は竹内好を中心に当時の論壇を分析し、日本のナショナリズム問題と安保闘争の遺産を結べようとし、アジア主義と明治維新の再定義を試みた竹内好の挑戦について検討する。

2．日本におけるナショナリズムの実像

竹内好がナショナリズム問題を扱うのは1950年代の「国民文学論」から始まった。当時、日本の知識人の中では、ナショナリズム問題は共通の課題であった。この問題を取り上げた論者には、二つの態度がある。ひとつは、戦争までの日本では、ナショナリズムは天皇制のイデオロギーと結合し、極めて悪い意味で理解された。もうひとつは、中国やインドが代表するアジア（のちにアフリカと合わせられるが）における独立運動が、世界中に大きな影響を及ぼしたことを鑑み、アジアのナショナリズムをモデルにして日本のナショナリズムを再建する考えである。

これに対して竹内好は、いわゆる「悪い」ナショナリズムを良い方向に導く可能性に注目した。まず、中国やインドのナショナリズムは革命勢力と結び付くのに対して、日本のナショナリズムは必然的に反動勢力に流される（ウルトラ・ナショナリズム）、とする丸山真男の論述があった。竹内好は、丸山のこの論理を補充し、中国のナショナリズムも反動勢力と結び付くことがあると指摘した。それを踏まえて彼は日本の「よき」ナショナリズムを発掘する方法について、次のように述べている。

ウルトラ・ナショナリズムに陥る危険を避けてナショナリズムだけを手に入れることができないとすれば、唯一の道は、逆にウルトラ・ナショナリズムの中から真実のナショナリズムを引き出してくることだ。

（中略）

反革命においてさえ革命の契機をつかみだした清末以来の革命者の努力の上に出てきたものである。その典型は魯迅だ。したがって、魯迅の抵抗こそ、今日学ぶべきものである。[2]

ここで、彼の魯迅を以て日本を考察する方法は、「近代とは何か」から一貫していることが分かる[3]。魯迅が文学者であるように、この時期の竹内好のナショナリズム論は文学界に限定されていた。革命と反革命、という選択はすでに過去のものであるため、竹内好のナショナリズム論は歴史の考察と議論に限られていた。だが、1960年、彼の求めたナショナリズムが現実と結び付つく場が来た。それは、安保闘争である。

1959年から1960年にかけて、日米安全保障条約の改定に反対して、学生・市民が参加する大規模な国民運動が行われた。これが、いわゆる60年安保闘争である。運動当初の目標は安保反対だったが、運動自体が高まるにつれて、反対の的は、旧ファシストの象徴である岸信介に移っていた。こうして、安保闘争には「民主主義」運動の要素もみられる。

1959年の「基本的人権と近代思想」という講演をはじめ、竹内好は知識人の一人としてこの運動に参加した。運動の最中である1960年６月２日、彼は「四つの提案」という講演を行い、大きな反響を呼んだ。この「四つの提案」の分析から、安保闘争における竹内好の主張を抽出することを試みよう。

まず、この四つの提案は、①いまこの運動は民主主義と独裁の対決である、②ファシストがやらないことをわれわれがやる、向うがやることはこっちがやらない。具体的には暴力を使う岸政府に暴力を使ってはいけない、③国際関係を絡ませてはならない、④この戦いは容易に勝つが、「下手に勝つくらいなら、この際うまく負けるべきだ」という[4]。

①で、竹内好は民主主義という言葉を使ったが、「「独立と均質と連帯の語感」を表現するに当たり、「民主主義」を避けて「国民」や「民族」を用いていた」[5]。彼にとっての民主主義はヨーロッパで発祥したものではなく、アジア・アフリカの独立運動をもたらしたナショナリズムが象徴する独立精神である。この特別な定義によって、竹内好にとっての安保闘争にはもうひとつ重要な意味が生じた。つまり、日本国民は「自らの運命を自力で切り開くことができるという自信」が生まれ、「この自信はアジア・アフリカのナショナリズムに通ずるものである」[6]と述べたように、日本が精神的にアジアへ回帰することを期待していた。③について、竹内好は一切の国際勢力の関与を拒否し、日本における抵抗観の確立を掲げ、「この抵抗の伝統・抵抗観という

ものを確保することだけを目標としてこの戦いを進めてゆきたい」[7]と意気込みを語った。また④について、竹内は岸政権を打倒するのは容易であるが、国民の心理を変えることは簡単ではなく、「岸さんのような人が出てくる根――これは結局、私たち国民にある、弱い心にある」[8]と考えた。

以上の分析から、竹内好の主張は以下のようにまとめられる。

第一、国民文学論の時代、竹内好の設定した革命と反革命の状況は安保闘争の時点において、実現された。岸政府はファシストの象徴であり、反革命の役を演じた。安保闘争は、反ファシスト運動である以上、日本の歴史における革命運動になると、竹内好は判断した。この意味では、安保闘争は明治維新と同じ課題に直面している。彼は、安保闘争は明治維新の延長であり、安保闘争によって日本を革新することを考えた。

> 私は明治の血を引いているから、胸のうちに自分に呼びかける声を聞く。「各位一層奮励努力せよ！」[9]

この呼びかけは、明治維新と現実を結び付けようとする竹内好の心情をうまく表現している。彼は「岸の根」は「私たち一人ひとりの心の底にある」[10]と述べたように、根本的に日本を変えるために、自分を改革し、意識の中に抵抗を植え付けようとする。そうではないと、「既成政党の妥協と取引によって抵抗権の確立が流されてしまう危険があるからだ」[11]という。

第二、安保条約反対の観点から見ると、竹内好は安保が日中国交回復の障害となることを意識していた。この意識自体は特に特別な考え方ではない。だが、安保闘争の的が岸政府に移った後も、安保闘争を通じて日本が再びアジア・アフリカと結び付くことが竹内好の期待したところであった。彼は、日本と中国の国交回復に不可欠な条件として、日本の独立を強調した。

> 中国の基本的な日本観は、日本がまだ完全独立を回復していない、ということにある。中国の対日政策は、この基本認識の上に組み立てられている。そのために日本人の日本観との間に食いちがいが生じている。国交回復がうまくゆかぬのは、主として政治的理由によるものであるが、その根底には、こういう思想状況の食いちがいがあることを忘れてはならない。[12]

竹内好は、彼のいう「民主主義」が、ナショナリズム的なものであり、そしてアジア・アフリカにおける独立運動を支える力であると述べた。別の言い方をすれば、竹内好は安保闘争を日本の民族独立運動であると考えているのである。日本がアメリカのコントロール下におかれている「半ば被占領国」である状況は、また明治維新の歴史状況と似たように見える。竹内好には、明

治維新の歴史選択によって日本が「脱亜」したことに対し、安保闘争においてこそ日本をアジアへつれ戻すという意識が強くみられる。

竹内好のアジア論は、一方では、不断に明治維新を念頭にしており、もう一方では、中国革命との連動として考えている。これまでの竹内好研究は、1960年代以降の竹内好について殆ど言及していない。「安保闘争の終焉後には、彼は急速に論壇の表舞台から退き、もっぱら魯迅の研究に没頭したあと、一九七七年に肺ガンで死去した。」[13]これは、多くの論者の間にほぼ共通認識となっている。安保闘争中大学教授を辞めることでマスコミに大いに取り上げられ、「売名」だと中傷されたことさえも経験した[14]竹内好は、急に姿を消したわけではなかった。小熊英二によると、1960年代から、「反近代主義者」として竹内好が若い世代に評価されはじめた。

> 1960年代以降には、全共闘運動のなかから「戦後民主主義」や「近代」への批判が台頭し、竹内は三島由紀夫などとならんで、「近代主義＝戦後民主主義」を批判した民族主義者であるといった評価も現われた。戦争の時代はもちろん、1950年代の事情もよく知らない若者たちは、戦後において竹内だけが突出して「民族」を唱え、「近代主義」を批判したのだと考えがちであった。[15]

民族主義者という評価は、竹内好が行ったアジア主義研究と深く関連する。しかも、1960年代、大東亜戦争評価をめぐる論争が起こり、大東亜共栄圏の思想史的な意味など議論が盛んになった。これらの動向に、竹内好はすべてかかわっているわけではないが、彼が発掘したアジア主義と深く関連している。1960年代アジア主義をめぐる言論について検討していきたい。

３．七年間の報告：1960年代

安保闘争の勢いは岸信介の退陣により、急速に衰退した。ファシスト打倒という目標は達成できたが、安保条約は既成事実として受け止められた。竹内好の期待した「抵抗」と「独立」は、安保条約締結を阻止することができなかったし、日中国交回復も当然達成できなかった[16]。岸内閣に代わって登場した池田内閣は、経済中心の政策をとった。これに伴い、安保論の代わりに経済論が盛んになった。

1961年１月から、竹内好は７年間連続で『週刊読書人』に年間報告の形で寄稿し、彼の活動や時代に対する見方を記した。この七年間の報告を通して、竹内好の思想動向を掴むことができる。

７編の報告の中に、以下三つの問題について言及されている。

①安保闘争の問題。安保闘争後の一年、竹内好はこの運動から国民が独立闘争の経験を獲得したことを重んじ、将来に対して楽観的な希望を示した。

新安保条約の成立（法的および政治的に疑義があっても事実そして成立を認めざるを得ない）によって、反対運動の効果を除外していえば、安保体制は強化された。それだけ国民生活は制約を蒙り、不十分ながら国民的規模での抵抗の経験を始めて身につけた、とはいえ、他の何物にも代えがたい収穫だった。人民の抵抗こそ、制度としての民主主義を含めて、すべての創造の源泉である。[17]

安保闘争の結果に対して知識人の反応は様々である。安保条約の自然承認で敗北感を喫した人は当然いたが、丸山真男のように、運動の中で民衆の中にあらわれた「秩序意識と連帯感」を評価する人もいる[18]。丸山真男が重視したのは、「近代的な人間の素質」であるが、評価の仕方において竹内好と違った。すでに分析した通り、竹内好にとって、安保闘争は現に日本で進行中の革命だった。この革命が失敗に終わったとはいえ、竹内好はすぐに失望に落ちていたわけではなかった。彼が求めたのが安保闘争の勝利という結果だけではないからである。彼の近代化の型論のなかに述べたように、真の革命は、中国革命のように失敗を繰り返し、反革命と革命の対決のなかで成長するものだという。この意味で、60年代安保条約の成立は革命を育てる理想的な結果である。竹内好は安保に対する支持と反対の両論派の論戦を期待した。

希望条件は、分類をあまり単純化しないこと、また反対派を討論にさそうことである。前者は説明を要しない。後者で反対派というのは、実例で示すと福田恒存（『常識に遮れ』）、江藤淳（『日付のある文章』）などである。彼らの「進歩的文化人」ヒヤカシには聴くべきものがあるし、それに耳をふさげば国民運動という評価が成り立たなくなって、自己矛盾におちいるからである。いわゆる「民主主義派」は、安保討議を先へ延ばすことを条件にして抵抗の総力結集を呼びかけたのであるから、今になって条件つき安保賛成論者を排除するのは理にかなわない。むしろ、今こそ安保論議を復活すべきであろう。[19]

七年間の報告の中で、安保闘争に関する言論は、一年目にしか見られなかった。安保闘争が革命であれば、過去にこだわるより、革命をいかにして延長させるかが、真の思想的な課題である。竹内は自分に課した任務は、「私はネーションを固執」[20]することであると決めた。つまり、安保闘争の問題は、ナショナリズム問題として引き継がれていた。

②明治百年祭の問題。ナショナリズムに固執する努力の成果の一つは、1963年のアンソロジー『アジア主義』である。そして、竹内好が「近代とは何か」と「日本のアジア主義」の最後に述べたように、日本の革命の源泉を探り、アジア主義を再評価するにあたっては、不可避に明治維新の思想史的な位置にかかわってしまう。

竹内好は、安保闘争の最中に、明治維新百年祭を最初に提唱した一人であった。

私は一つの提案をしたい。1968年を目指して、論壇が共通の課題を設定すること、その課題は、明治維新百年を祝うべきか祝うべきでないか、祝うとすればどういう形で祝うべきか、ということである。私の希望をいえば、私は明治維新百年祭を「黄金の60年代」の一大行事にしたい。[21]

1961年から三年間、竹内好は積極的に明治百年に向けて思想的な準備を行おうとしたことは、報告の中から確認できる。しかし、四年目の1964年の間に、竹内好の思いには少しの変化が見られた。

今のような明治物の流行現象がおこることを私は予想していなかった。薬がききすぎた感がなくはない。[22]

恐らく明治物の流行現象は、今日までもテレビドラマで演出され続いているように思う。さらに、六年目の報告では、竹内好は自ら提唱した明治維新百年祭を、「できれば提案を取り消したい」[23]と言い出した。結果として、「明治維新百年祭」は彼の希望と違う形で行われたことになる。

「明治百年」は国家行事となり、文部省版権御所蔵の『期待される人間像』は公刊され、２月11日祝日案は晴れて陽の目をみ、勲章は濫発された。[24]

竹内好の考えとしては、反政府運動としての安保闘争から抽出された民衆的な抵抗の希望は、明治維新を記念する思想の潮流に託された。しかし、この抵抗の希望は、再び政府に吸収される結果になったといえよう。1968年、「明治維新百年祭典」は国家事業として大いに行われた。竹内好はこの祭典と全く無関係である。しかし、本来竹内好が期待した明治維新百年を通じて何を得ようと考えたか、次節で検討を加えたい。

③中国革命の問題。1962年中ソ論争が起こり、1964年中国の核実験が成功する。更に1966年から文化大革命ははじまり、1960年代の中国は世界の注目を浴びつづけた。安保闘争のなかでも中国革命への注目を呼びかけた竹内好は、1963年に主催する「中国の会」で雑誌『中国』の創刊号を出版し、人民中国を紹介する事業に取り込み、自らも多くの紹介文章を書いた。竹内好は、これらの業績を、魯迅の翻訳と合わせて、「私的」な仕事と称して、報告に記した。この上、「ネーションへの固執」と呼応するように、竹内好は自らに以下の思想的任務を課した。

日本人は、方法をもってすればそれ（植民地革命の過程：引用者注）が理解できる。そ

の方法は、明治維新と、維新の一結果である明治国家を追跡することによって発見されると思われる。明治維新と中国革命とは、一面連続、一面断絶の関係にあるので、もしその連続面を取り出して理論化がなされるなら、植民地革命の一般理論をつくることも夢ではないかもしれない。[25]

アジア主義は日本の近代化以来のアジアに対する関心を示したが、明治維新と中国革命の思想的な連続はどこにあるかについて、別の論考で検討を加えたい。

以上、七年間の報告分の中の重要問題をまとめた。この報告は本来であれば、1960年代を展望・総括するものであり、10年間連載し続ける予定だったが、1967年の七年目に終わりを告げた。原因の一つは、竹内好の健康事情であったが、もう一つは、彼は一種の絶望の感情を見せたのである。

亡国の民は、亡国の歌をうたうよりほかになすことがない。すなわち一句、古人に借りていわく、我ときて遊べや親のない雀。

地火はあるだろう。地火が絶えることはあるまい。しかし、地火の噴出をこの目で見ることは断念するほかないように思う。雀と遊ばんかな。[26]

地火は竹内好のいう民衆の中に潜まれた革命の力であろう。安保闘争は地火噴出の兆しであったが、噴出ではなかった。「亡国」といういい方はいかにも過激であろうが、竹内好をそこまで絶望にさせたのは、なんであろうか。明治維新百年祭を提唱してからその提唱を取り消すまで、すなわち、明治維新の評価をめぐる議論の中に、この絶望の原因が窺える。

４．アジア主義と大東亜戦争肯定論

1963年、竹内好は『アジア主義』を編纂した直後、林房雄は９月から『中央公論』で「大東亜戦争肯定論」の連載を執筆し始めた。「大東亜戦争（太平洋戦争）は百年戦争の終曲であった」[27]という独特な発想で世の中をにぎわせた林は、幕末時代に「西力東漸」に対する思想的反撃を図った思想家まで遡り、「考える」日本人像を描こうとした。

「考える」日本人の反対側には、林房雄は戦後民主主義論者を想定した。彼は、戦後進歩的知識人が、戦前日本をドイツのヒトラーとイタリアのムッソリーニに因んで、日本の右翼と軍部をファシストと規定し、日本におけるファシズムの存在を信じることに反感を示した。

マルキシズム系の文書だけではなく、いわゆる進歩的学者諸氏の著書を読んでいると「天皇制ファッシズム」「軍部ファッシズム」「右翼ファッシスト」などという用語がふん

だんに出てくる。日本にもムッソリーニ・ヒットラー流のファッシズムが存在していたこと、その主力は軍部、と右翼であり、その頂点に天皇が位し、日本国民をあざむき、強制して「無謀な戦争」に巻きこんだということを、これらの進歩人諸氏はほとんど先験的に信じこんでいるようだ。[28]

さらに、林房雄は、進歩知識人は東京裁判に迎合していると批判を行った。すなわち、いわゆる進歩的な知識人は戦勝側によって強制的に貼り付けられたレッテルにそのまま服従したと批判した。

と言っても進歩的学者諸氏がこの俗説の発明者であるとは私は思わない。発明者はアメリカ、イギリス、ソ連を始めとする当時の連合国側であり、第二次世界大戦は彼らによって「ファッシズムと民主主義の戦争」だと規定され、後者の当然な勝利によって終結したと説明され、理論づけられている。日本の進歩学者諸氏はこの連合国側の俗耳に入りやすい戦争イデオロギーまたはスローガンをそのまま受入れただけであって、要するに、優秀な俗耳の持主はまず彼ら進歩学者諸君であったということになる。[29]

林は、明治維新以来、日本に存在した右翼勢力は、ドイツやイタリアのファシズム政権と違って、政権奪取した動きがないことを論証した。また、日本の右翼思想は、ヒットラー政権獲得の1933年とムッソリーニローマ進撃よりはるかに早い1880年代に形成した事情を説明し、ファシズムという概念が取り入れられた不都合を見出そうとした。[30]

東京裁判への異議申し立てをした同時に、かつて日本は戦争を起こした行為にたいする合理的な説明は自然に求められる。林房雄は日本が行った戦争は欧米列強へ抵抗するためにやむを得ずに行ったものであると主張したことはよく知られている。ここに注目したいのは、林房雄は『大東亜戦争肯定論』の中で数回にわたって竹内好の「日本のアジア主義」を引用し、これを自分の論理に組み込めたことである。例えば、アジア主義の侵略性について林は以下のように描いた。

竹内好氏によれば、『日本帝国主義の一元流――玄洋社の研究』の著者Ｈ・ノーマンは玄洋社と黒竜会員の活動を「さも殊勝げに朝鮮を中国の虐政から、満州をロシアの野望から『解放』すると称して、これらの地域の民間諜報行為と政治陰謀に従事した」と評しているそうだが、これは、ノーマンの目がアジア人の目でないということの証明にすぎない。これに対する竹内好氏の「日本の対外膨張を、すべて玄洋社の功（または罪）に帰するのは行き過ぎである。初期ナショナリズムと膨張主義の結びつきは不可避なもので、もしそれを否定すれば、そもそも日本の近代化はあり得なかった」という批判は十分な成立

の根拠を持つ。[31]

座談会「近代の超克」で活躍し、「印度は滅び支那も破れたが、日本だけが西洋の波を喰いとめ得」て、「然るにヨーロッパに対抗して生きのびるためには、実用的意見に於けるヨーロッパ文明を受け入れなければならなかつた」という林房雄は[32]、戦後になってもなお西洋に対する抵抗を諦めたことなく、竹内好のアジア主義論を断片的に借り、大東亜戦争は必然であるように議論を敷衍した。このような「大東亜戦争肯定論」は直ちに世論をわき起こし、皇国主義史観の復活である、あるいは事実を無視する暴論である、というような激しい批判を招いた。肯定論の国家エゴイズムの独善的な性格は、戦争のアジアに対する侵略的な性格を隠蔽してしまう。これについては、林房雄の『大東亜戦争肯定論』が『中央公論』に連載される時期から、すでに上山春平によって批判された。

> 林房雄氏は、本誌に連載された「大東亜戦争肯定論」にて、大東亜戦争をアジア民族の解放戦争と見る見地を提出されたが、私は、植民地解放戦争と見るよりは、むしろ植民地再編成をめざす戦争と見る方が事実に即しているように思う。[33]

上山は大東亜戦争を肯定する林に論述には、戦争の侵略的な性格を隠蔽し、帝国主義同士の戦争という観点を落としていると指摘した。竹内好も上山の観点に同意するという。

> 百年間をひとまとめにした日本近代の再検討という課題の領域では、収穫といえるかどうかは未定だが、林房雄氏の「大東亜戦争肯定論」（『中央公論』九－十二月）が話題を投げた。少なくとも人さわがせの効果は確実にあげた。これは歓迎されるべきである。仮説の提出は大胆であってよろしい。もっとも私は林論文の論旨には賛成しない。上山春平氏の批判の方に賛成する。（中略）
>
> それから私の編で筑摩書房の『現代日本思想大系』の一冊として出た「アジア主義」も、手前ミソだが、思想史の整理方法について新見解を提出したつもりである。[34]

言説が乱用された竹内好は、侵略的な性格を隠蔽する林房雄の肯定論を批判した論文をほとんど残していない。逆に、肯定論を歓迎するという彼のスタンスは、いささか不可解に思える。しかし、同じく大東亜戦争の思想史的意義を提起した上山の論文の中に、竹内好が期待したものは足りなかったことから、逆説的に竹内好が「歓迎」を示した理由が見つかる。上山は、明治維新における日本の選択をこのように捉えた。

明治維新から大東亜戦争にいたる開国日本のコースが、ほぼ的確にえがきだされている。

開国にふみきることは、封建制の廃棄←産業革命←後進国の侵略←先進国との衝突というコースを、ほとんど論理的な必然性をもって含意していたのである。[35]

上山は、歴史の選択としての明治維新は、最初から日本の侵略のコースを決めたと考える。林房雄に対する批判は一致しているとはいえ、アジア主義において本来連帯を図る「心情」を孕むという竹内好の意見は上山の侵略必然論と違うのは明らかである。竹内好の「心情」の位相において歴史を考察する姿勢は、林房雄と共有しているように見える。

竹内は、林房雄を批判するより、林の欠点を独自の視点で指摘した。

私の印象では、林氏には中国史の知識が乏しく、中国民衆への共感が欠落している。これは戦争中に中国へ渡った既成知識人にほぼ共通の盲点である。彼ほどの明敏な頭脳にその自覚がないのは惜しい。[36]

林房雄の『大東亜戦争肯定論』は、戦前のアジア主義を欠点まで継承した議論であるように、竹内好の目に映っているのではないか、と筆者は考える。林房雄の肯定論に見られる進歩主義史観に対する批判は、本来1950年代に登場した竹山道雄の保守的な議論と重なる部分があるが、肯定論には新たに「抵抗運動」という要素が加えられている。林房雄の肯定論を問題視しないといけないのは当然であろうが、竹内好の場合は、林房雄を通じてアジア主義の問題性を大いに議論する可能性を見込んでいるのである。

竹内好と林房雄の論説の中に見られる、西南戦争や征韓論に対する関心で共通ある。竹内好自身が提唱した明治百年祭と合わせるように、当時時代的な話題にもなりつつあった明治維新の再評価問題は、自然に議論の中心となった。竹内好は明治維新百年に向けての思想的な準備の一つとして、歴史を再評価する新しい方法論を提出することを重視した。

明治国家を生み出した源泉をさぐること、言いかえると、明治国家を対象化できる方法を発見すること、これが維新百年を記念する意味である。

戦後民主主義は、それなりの成果はあったが、こういう歴史整理の方法としては、まず不適格であった。それは歴史を切断することによって、かえってそれみずからの成立根拠をあやふやなものにした。戦後民主主義が一般理論たりえないのは、二十年間の実績が示している。われわれは、それに代るものを求めなくてはならない。たぶん、その試みの一つが、いわゆる近代化論だろう。

そして近代化論は、このところ花盛りである。ロストウやライシャワーは論壇の一部、とくに文化フォーラムの陣営に歓迎されている。[37]

こうしてみると、林房雄と竹内好は戦後民主主義の欠点に対する認識を共有している。また、竹内好が言及した「近代化論」は林房雄も意識している。

その思考の結果が人それぞれによって右または左に傾きがちなのは、現在日本のおかれている国際的環境のやむを得ない、または悲しむべき作用であるが、もしそれらの人々が真の思想家であり、職業的反共産屋でないかぎり、討論を通じて、「一つの日本人の思想」を生み出すことができると私は信じている。現実には、これははかない望みであり、そこに到達しない前に日本は二つまたは三つにひき裂かれてしまうかもしれぬが、私はこの統一の可能性を信じたい。それが私の「大東亜戦争肯定論」の希望なのだ。幸いに現在の私は「ライシャワー路線」にも「フルシチョフ・ライン」にも「中共ロビイ」にも無縁である。この一つの希望のみにたよって書きつづける。[38]

1960年代は、周知のように高度経済成長期である。高度成長に伴い、社会変動が急速に進んでいた。戦争を反省するよりは、多くの戦後知識人によって否定された日本のイメージから抜け出して、日本を否定する戦後民主主義の理論に対する反抗として、「近代化論」は行われた。加えて、「ライシャワー路線」と呼ばれるアメリカ政府の働きかけは、この動きを加速させた。竹内好は近代化論による明治維新の新しい解釈を期待していなかったという。

問題は、近代化論が、日本の近代化を説明するように、それとおなじ指標とおなじ論理を使って、他のアジア諸国、とくに中国の近代化を説明できるか、ということだ。私はこの点疑問なきをえない。世界が等質な、量的に比較できる単位によって構成されている、という前提の点では、近代化論も唯物史観と変らない。ただ一方が、歴史の連続を強調し、他方が断絶の契機を重視するという差があるだけだ。したがってどちらも、中国流の永続革命を包括的にとらえることはむずかしい。[39]

竹内好はこの発想に基づいて、『大東亜戦争肯定論』の位置づけについて以下のように指摘した。

林房雄氏の『大東亜戦争肯定論』は、惜しいかな、こういうアプローチを欠いているために、一般理論化はむずかしいように思う。維新百年はせっかくのチャンスなので、もっ

といろいろの思想的冒険が試みられて然るべきだろう。[40]

竹内好は、林房雄のものは一般理論化できないと指摘した同時に、議論は『大東亜戦争肯定論』にとどまらないよう、「思想的冒険」を呼びかけた。しかし、竹内好の意図に反して、アジア主義をめぐる議論は正面から取り上げられなかった。竹内好が明治維新を評価した仕方は、林房雄の侵略隠蔽の性格とセットされ、批判の俎上にあげられた。ここでは竹内好と直接議論を交わした遠山茂樹の批判を典型として取り上げる[41]。

今日の思想状況の中で、（竹内好の考案した「侵略主義と連帯意識の微妙な分離と結合」[42]は：引用者注）林房雄氏の『大東亜戦争肯定論』や葦津珍彦氏の『明治維新と東亜解放』の所論とどこがちがうのか、それへの批判ぬきに、西郷隆盛から内田良平にいたる「東亜共栄圏の思想」を受けつぐべき思想的伝統とも説くことが、読者に対しどんな責任を負うことになるかの自覚なしに書かれたとしたら、あまりにも無責任である。われわれが求めているアジア・ナショナリズムへの自覚やアジアの連帯の意識を戦後の情勢の変化といった外から与えられるものとしてではなく、うちの自主的な意識の成長として、歴史の伝統の中から発掘しようとする意図から出たことを理解できるとしても、論述の内容はその意図からまったくかけへだたっているし、意図のゆえに、その所論の社会的役割の責任はまぬかれることはできない。[43]

（竹内好に対して：引用者注）意図が手段の評価を何ら保障しない。…侵略の手段をとったか、それへの抵抗の手段をとったか、表面の意図では、同じ志向があらわれていても、手段のいずれを選択したかで、「好意」を客観的な善意たらしめる本物の思想・意識と、「好意」が悪意になり、しかもその責任を自覚しえない、ニセモノの思想・意識との間の区別が、厳密に問われなければならない。[44]

遠山茂樹は「学者の社会責任」という角度から、「侵略」というマイナスの行為からプラスの評価をつけることを危惧した。これに対して、竹内好は遠山茂樹に以下のように答えた。

私は逆に、連帯と侵略の二分法の妥当性を疑うことから出発しているのだ。そのことは『アジア主義』解説の最初のところに述べてある。…私の問題は、連帯と侵略の組み合わせの諸類型を考えることにある。類型を考えたうえで何をするか。そこまではまだ考えていないが、たぶん遠山氏の期待するような「現代的意義」は出てこないだろう。しかし未来的意義は大いにあるつもりだ。それがなければ励みにならない。私は私なりに神を信ず

る。遠山氏の神がカトリック的なのに比べると、私の方は、より危機神学的な神ではあるが。これが私の党派性だ。

たぶんこのことは、突き詰めていくと人間観および歴史観（または歴史像）の違いに行きつくだろう。遠山氏において、人間は動機と手段の区別が明瞭な、他者によって丸ごと把握できる透明な実体であるし、私にあっては流動的な、状況的にしか自他につかめぬものである。歴史もまた、遠山氏には重苦しい所与であるし、私には可塑的な、分解可能な構築物としてある、という違いがあるように思う。[45]（傍点引用者）

遠山茂樹が描いた明治維新は、絶対主義権力の形成過程である。彼にとってこの歴史を否定することなしには、戦後の新しい歴史認識は形成されない。遠山の観点から見れば、竹内や林、さらに日本の右翼がそろって貴重視した西郷隆盛は、アジアに対して侵略を図る権力者である意味で、明治政府を主導したグループと根本的に違わない[46]。

しかし、竹内好の場合は、歴史を過去のものとしてみるよりは、むしろ現在は過去の投射として把握している。現在にあらわれた思想の動向を、歴史的に読みなおすことによって新たに構築する可能性を探る努力こそ、竹内好が考える思想の課題である[47]。遠山にとっての歴史は、事実としての「侵略」であるに対して、竹内好にとっての歴史は「心情」であり、この「心情」から複雑で立体的な歴史を構築しようとしたのである。

前述のように、竹内好は日本政府が明治維新再評価の発言権を独占することに、抵抗感を示した。この点について、遠山茂樹も共通している。遠山のいう「今日の思想状況」とは、前述近代化論の流行がもたらした日本社会の保守化を指している。遠山自身は、ナショナリズムへの対応において、竹内好から多く学んだと認めている[48]。にもかかわらず、遠山茂樹は、竹内好を林房雄と同罪したのは、日本政府の動きに対する強烈な警戒感と不可分である。

日本帝国主義の復活として安保条約締結の情勢に呑み込まれることも起こりかねない。経済の高度成長の謳歌と大国意識の強調、愛国心とアジアに対する思想的使命の提唱、歴史教科書の検定は、明治以後の工業化の達成と国際的地位の向上に重点をおけと強制し、「大東亜戦争」の挙国一致と東亜解放の理想を書けと指示する。この数年間の思想状況を巨視的にとらえるとき、こうした権力側の発言にそう方向が論壇でも強まっていることは明らかである。[49]

竹内好のアジア主義研究を可能にしたのは、知的な探求の態度として、「正しさ」へのこだわりを解消したからだ[50]。彼は、林房雄、そして明治維新百年祭へ期待を寄せ、「正しさ」にこだわらずに、思想の衝突という運動の中から新たな思想の創造を図り、アジア主義の心情を掬い上げ

ようとした。しかし、竹内が望んでいた論争の基盤は成立しなかった。一方、学問的な方法論の違いが存在するが故に、遠山茂樹が代表する左翼の知識人は、この論争の前提である「心情」の可能性を受け止められなかった。もう一方、体制側の明治維新に対する強力なイデオロギー操作に直面するとき、知識人の抵抗は失敗に終わらざるを得なかったといえよう。

5．おわりに：二つの「明治百年」

結果として、当初竹内好が期待していた「明治百年祭典」は、濃厚な国家主義の色に染められ、国家行事として盛大に行われた。竹内好は、アジア主義の中で提起した「西南戦争を革命とみるか、反革命とみるか」という問題の視点は、明治百年祭に当然ともいえるほど問題にされなかった。しかし、国家レベルの行事と違う位相で祝われた「明治百年」は、近代化論に取り残された明治百年祭の中身を提示してくれた。岡山県高梁市玉川小学校に行われた明治維新を祝う民間式典では、近代化論によって支えられた日本政府が主催する明治百年祭典とまったく趣旨の違う考え方が記されている。

> うちには、二百数十年にわたる徳川幕府の封建支配の矛盾が表面化しつつあるなかで、外からは、西洋諸国の植民地主義の大波が、わが国にも押し寄せてまいりました。この激動する時の流れの中にあって、真に日本の将来を憂う人たちが、自らを捨て、家族を顧みず、生命を賭してなし遂げたのが明治維新でございます。[51]（傍点引用者）

日本の民衆に土着しているこの情緒的な明治維新観は、国家祭典に排除され、またいわゆる進歩的知識人にも警戒されるかな、「大東亜戦争肯定論」的な保守言論に吸収され、一種の共同幻想に帰結されるしかなかった。竹内好は、傍点の文章で示したような、対内と対外の二重抵抗としての明治維新の精神を安保闘争後の社会運動に取り込もうとしたが、彼の主張は、日本政府に謳われた明治百年へ賛歌に対する警戒感とともに敬遠された。安保闘争の経験をどう生かしていくか、同時代の知識人として、遠山茂樹は竹内好と同様な問題関心を持っている。しかし、遠山は「歴史が動かされている」という実感を克服しようとし、安保闘争の経験を「早急に理論化する」ことを拒否した。歴史学者としての客観的な立場を保つためであると理解できよう。

一方、失望した竹内好は、1966年に自分の発言を三冊の評論集としてまとめて出版し、評論界から身をひいた。しかし、竹内好は自分の挑戦を完全に諦めたのではなかった。彼の思索が、日本の明治維新とアジアとの思想的な接点を探求し、明治維新と中国革命の比較する方向へ導かれていった。

註

[1] 鈴木洋仁，2014を参照。

[2] 「ナショナリズムと社会革命」，1951，竹内好全集（以下は「全集」と省略する）７：19-20

[3] 劉金鵬，2011を参照。

[4] 「四つの提案」，1960，全集９を参照。

[5] 小熊英二，2002：529

[6] 「日本人の自信について」，1960，全集９：189

[7] 「四つの提案」，1960，全集９：117

[8] 前掲書：118

[9] 「心境と見透し」，1960，全集９：109

[10] 「四つの提案」，1960，全集９：118

[11] 「心境と見透し」，1960，全集９：108

[12] 「日本の独立と日中関係」，1960，全集９：64

[13] 小熊英二，2002：446

[14] 東京地方発行1961年１月23日付夕刊の『読売新聞』学芸欄に、匿名による記事があり、名前を言わずに「大学の教授と助教授」が「名を売る」、と竹内好と鶴見俊輔を中傷した。これに対して竹内好は抗議を示した。[「中傷への抗議」，1961，全集９：261-264]

[15] 小熊英二，2002：445

[16] 1960年代、日本の経済界は中国と頻繁に接触し、いわゆるLT貿易という半官半民の経済交流が始まり、これが結局日中国交回復の前奏となった事実は、近年の研究で判明された。竹内好のような知識人はこのような水面下の動きをどれほど把握し、またどういうふうに強化したかは、重要な問題である。これについて、今後の研究で取り上げたい。

[17] 「一年目の中間報告」，1961，全集９：244

[18] 「こうした結果に対し、人びとの反応はさまざまだった。清水幾太郎は、安保自然承認の夜、敗北感に打ちのめされて泣いた。対照的に丸山真男は、闘争のなかで実現された「秩序意識と連帯感」の「圧倒的な印象」にくらべれば、「『自然承認』の瞬間などは私の脳裏の中のとるに足らぬちっぽけな場所しか、占めていなかった」と述べた。」[小熊英二，2002：546]

[19] 「一年目の中間報告」，1961，全集９：245

[20] 前掲書：246

[21] 「民族的なものと思想」，1960，全集９：63

[22] 「五年目の中間報告」，1965，全集９：391-392

[23] 「六年目の中間報告」，1966，全集９：413

[24] 「七年目の中間報告」，1967，全集９：424

[25] 「五年目の中間報告」，1965，全集９：393-3940

[26] 「七年目の中間報告」，1967，全集９：428

[27] 林房雄，，1964：23

[28] 前掲書：225

[29] 前掲書：226

[30] ファシズムという概念に関しては、1970年代の日本ファシズム論争を通じて検討されたのは事実である。近代日本史を叙述する際、ファシズムの代わりに、総力戦体制や戦時体制という言葉が使われるようになった。ただし、70年代ファシズム論争の中はファシズムという概念は東京裁判によって強制的に押し付けられたという立場ではない。

[31] 林房雄，『大東亜戦争肯定論』，1964：87

[32] 座談会「近代の超克」で林房雄の発言について、小論「心情としての「近代の超克」-「科学と人生観」論争という視点-」を参照［劉金鵬，2013］。

[33] 上山春平，1961：56

[34] 「四年目の中間報告」，1964，全集９：366

[35] 上山春平，1961：106

[36] 日記1963年12月Ｘ日付，全集16：482

[37] 「五年目の中間報告」，1965，全集９：392

[38] 林房雄，1964：151

[39] 「五年目の中間報告」，1965，全集９：392

[40] 前掲書：394

[41] 実は、竹内好をさらに激しく批判したのは、井上清である。意味深いのは、井上清は、前述1946年の北京シンポジウムにて明治維新について発表し、竹内好を日本の侵略主義復活を助勢した近代化論者として批判した［歴史学研究会 京都地区歴史部門研究連絡協議会 編，1964］。この批判の内容は、竹内好の「日本のアジア主義」を故意に組みなおした形跡があり、竹内好の本来の意図と違う論旨を作り出した欠点があるため、竹内好の激怒を買った。井上の竹内好批判について本論では取り上げないこととする。

[42] 「日本のアジア主義」，1963，全集８：110

[43] 遠山茂樹，「明治維新研究の社会的責任」，1965：17

[44] 前掲論文：28

[45] 「学者の責任について」，1966，全集８：272

[46] 遠山茂樹，『日本近代史Ⅰ』，1975

[47] このの歴史に対する考え方は、竹内好の毛沢東論にも共通している。彼は毛沢東の歴史観に

について、「主体は無であって、しかも超越的に対象の全体に合致する。毛沢東の歴史観において、歴史は所与ではなく、現在の意志の下に統率しうるもの、すべきものである」[「評伝 毛沢東」，1951，全集５：290］と述べ、一貫して日本のマルクス主義歴史学の硬直化を批判している。

[48] 「歴史学に即していえば、歴史をそう説明することが、一体どのような意味を、自己と日本人にもつことになるか、そのことをつきとめることによって、歴史の説明自体を吟味しなおし、そう歴史をとらえる以外に方法のない、ぎりぎりの歴史観をきたえてゆく歴史家の研究の姿勢、歴史研究の社会的責任のとり方と関わる問題である。このことは、竹内氏や上原専禄氏の発言から私なりに学んで、そう考えている。」［遠山茂樹，「明治維新研究の社会的責任」，1965：27］

[49] 前掲論文：15

[50] 劉金鵬，2012を参考。

[51] 庄志大乗会，1968：3

参考文献

丸山真男（1956-1957）『現代政治の思想と行動』未來社.

上山春平（1961）「大東亜戦争の思想史的意義」『中央公論』76（9），98-107.

上山春平（1964）「再び大東亜戦争の意義について」『中央公論』79（3），48-60.

林房雄（1964）『大東亜戦争肯定論』番町書房.

林房雄（1965）『続　大東亜戦争肯定論』番町書房.

マリウスＢ・ジャンセン（編）（1968）『日本における近代化の問題』（細谷千博，翻訳）　岩波書店.

庄志大乗会（1968）『明治百年記念式典式次第報告書』.

内閣総理大臣官房（1969）『明治百年記念行事等記録』.

遠山茂樹（1975）『日本近代史Ｉ』岩波書店.

竹内好（1980-1982）『竹内好全集』筑摩書房.

遠山茂樹（1992）『遠山茂樹著作集』第九巻　岩波書店.

安丸良夫（1996）『方法としての思想史』校倉書房.

小熊英二（2002）『〈民主〉と〈愛国〉―戦後日本のナショナリズムと公共性』新曜社.

松本健一（2006）『竹内好「日本のアジア主義」精読』岩波書店.

劉金鵬（2011）「竹内好：「近代化の形」理論をめぐる諸問題」比較日本文化学研究（4），99-113.

劉金鵬（2012）「竹内好：アジア主義研究の出発」比較日本文化学研究（5），1-19.
劉金鵬（2013）「心情としての「近代の超克」-「科学と人生観」論争という視点」国際文化研究（19），145-158.
鈴木洋仁（2014）「「明治百年」に見る歴史意識：桑原武夫と竹内好を題材に」人文学報（105），117-139.

Revolutionary Ideals and Asianism in the 1960s --Focusing on Yoshi Takeuchi's Theory of Asia

LIU Jinpeng

Key Words: Takeuchi Yoshimi, Asianism, Meiji Restoration, nationalism, reconstruction of history

Around 1960, Japanese intellectuals experienced the nationwide Security Treaty struggle. During this period, methods to use the experience of the Security Treaty struggle to influence Japanese society became a major ideological issue. Some scholars, most notably Takeuchi Yoshimi, attempted to link the Security Treaty struggle to the reconstruction of Japanese nationalism and developed unique arguments to support it. In this essay, the author will analyze the ideological activities of Takeuchi Yoshi during this period and examine his shortcomings in proposing Asianism and attempting to redefine the Meiji Restoration.